

ブラジル移民 100 周年記念式典会場視察

皇太子殿下もご出席される、本年 6 月 21 日にブラジル移民 100 周年記念式典が開催される会場のサンボドロモを視察しました。

平成 20 年 1 月、皇太子殿下は日本ブラジル交流年名誉総裁に就任されました。ブラジル側では、アレンカール副大統領が名誉総裁に就任されています。今晚は、先般行われたサンバカーニバルの上位 5 チームのデモンストレーションがあるし、3 位のチームは、ブラジル移民開始 100 周年ということで日本文化をテーマに選んだ、名門「ウニドス・デ・ビラ・マリア・サンバスクール」が出場するので、それだけは是非見て行って下さいということで、ご招待を頂きました。



会場へ行くには、目印のベルトを手首に付けて行かなくてはならず、全員が同じ T シャツを着て会場に向かいましたが、会場に到着したのは午後 11 時過ぎで、正直なところ昨晩は飛行機での移動でサンパウロに朝到着し、そのまま視察ということで、5 位から始まるサンバパレードの途中、何度も居眠りしかけました。会場は直線の広い道路で、両側には高いスタンドの見物席があり、最上階は VIP ルームという感じの部屋になっているサンバパレード専用に使われた会場です。1 チームは 2000 人～4500 人出場で、1 チーム 45 分位だったと思いますが、そのスケールの凄さは御堂筋パレードの比ではありませんでした。私達はスタンドの最上階で見えていたのですが、フロートがとにかくすごく大きくて、高さもおそらく 4～5 階の建物の高さ位はあり、その高さで安全ベルトをつけず、あまりしっかりしていないポールが 1 本あるだけの直径 1 m 位の台の上で、ポールを片手で持ったままサンバを踊るなんて、おそらく日本では安全許可がおりないだろうなと思います。全て自己責任の上でやりなさいということなのだと思います。

午前 2 時もまわり、やっと第 3 位の日本文化をテーマにしたサンバチームの演技が始ま



りました。それ迄は時々ウトウトしていましたが、このチームだけはしっかりと見る事ができました。先頭は連獅子をイメージした衣装で、手に金色の扇を持ち、振付けも日本舞踊の要素を取り入れたもので、それ迄のチームの演技とは明らかに違い、とても独自性があり、素晴らしいと思いました。次から次へとスケールの大きなフロートが続き、すごい量の金色の紙吹雪を吹き上げ、そのすごさに圧倒されました。観客も一緒に音楽に合わせて踊り出す光景は、まさに世界に誇るカーニバルだということを実感しました。あと2位と1位のチームの演技があったのですが、体力も限界ということで途中で失礼し、

ホテルに帰りました。ホテル到着はなんと午前4時でした。

明朝は午前9時出発です。

2月9日（土）

バイオエタノール

サンパウロ市郊外のピラシカバ市へバイオエタノールについて学ぶ為、行きました。州立サンパウロ大学バイオエネルギー研究サポートセンターのネウソン・セラ氏の案内で、一面に広がるさとうきび畑を視察しました。



自動車等の輸送用燃料としては、エネルギー密度が高く、可燃性に優れていることが重要な特性であり、故に液体燃料である石油燃料の利用が多く、石油消費量の約4割を輸送用燃料が占めている要因となっています。

エコ燃料も基本的に液体燃料であり、石油燃料の代替として、又、混合可能な燃料として注目を浴びています。

輸送用バイオマス（生物体をエネルギー源、又は工業原料として利用すること）燃料としては、

①バイオエタノール

さとうきびやトウモロコシなど農作物や木材・古紙等のセルロース系バイオマスといった植物由来の多糖から作られる液体アルコール（ C_2H_5OH ）

②バイオディーゼル（BDF）

廃食用油等の植物性油脂等をメチルエステル化して得られる液体燃料で、主な成分は脂肪酸メチルエステル

③バイオマス液化燃料（BTL）

バイオマスの熱分解ガスを FT（Fischer Tropsch）法により合成して得られる液体燃料

④エコ軽油

植物性油脂等を水素化精製して得られる炭化水素油

などがありますが、一番実用化が進んでいるのがバイオエタノールです。

ブラジルでは、ガソリンスタンドでバイオエタノールが燃料として売られています。値段はガソリンの半分強位ですが、値段は収穫量によって左右され、燃費はガソリンの70%位だそうです。

さとうきびはブラジルでは、1・2月は雨期で甘さも充分ではなく、3月が年1回の収穫期です。育ちは徐々に悪くなりますが、同じ根で年6～7回収穫できます。さとうきびは45%が砂糖、55%

がアルコールで、しぼりかすも燃料効率が高いので火力発電に利用でき、100%無駄なく



使い切れます。とうもろこしのエタノールより安価に生産できる理由がそこにあります。アメリカでは、とうもろこしからバイオエタノールを作っていますが、それはさとうきびが気候条件に合わず作れないからで、アメリカはとうもろこしのエタノールを守る為、ブラジルからのエタノールに関税をかけ、保護政策を取っています。

訪問したのが2月で雨期の為、収穫前でしたので残念なことに工場は稼働しておらず、視察は出来ませんでした。

州立サンパウロ大学

土曜日で休みにも関わらず、さとうきび畑を案内して下さったネウソン・セラ氏から、州立サンパウロ大学の中の部屋でバイオエタノール生産について、又、農学部教授ジョゼー・オタヴィオ・ブルート氏から大学の概要について説明を聞きました。



サンパウロ大学は、800ha の広さがあり、教授数は 300 名、うち 9 割が博士号を持ち、5000 人の学生のうち、2 割弱を日系人が占めています。

創立 104 年で、ブラジルの農業技術の開発は、この大学が主体で、エタノールについても先進的に研究が進められており、国内の博士の 6 割はこの大学の出身者です。周辺に 350ha の 3 つの研究所もあります。

エタノール工場は、民官企業の投資により、月に 1 ヶ所ずつのペースで作られています。それは主にさとうきびの栽培に適した国の南部です（年間雨量が 1200mm ある所）。

1～4月まで雨が降り、その後乾燥するのがさとうきびにとってはベストで、2007年は（前年比15%upの）4億5,000万tの収穫がありました。（大豆は6,000万t、米は1,200万t、豆が300万t、麦が100万t）

ブラジルでは1億8,000万頭の牛が放し飼いで飼われていますが、200万haの面積が必要で、草を生えさせそれを牛が食べるのですが、土地の質は悪くなるそうです。23万haはさとうきび（カンナ）を植えるのに適した土地で、牛の飼育からカンナ栽培に変更するところが増えてきているそうです。さとうきびの大農園の方が利益率が良いということです。2年前から大企業による農園の買収が進み、現在は工場の50%が大企業のものです。外国資本が全体の15%を占め、エタノール生産に拍車がかかっているのが現状です。収穫したさとうきびは工場に運ばれ、砕いた後、絞りにかけると、1本のうちエタノールがとれる水分が75%、14%が繊維、11%が葉ですが、繊維と葉の25%はバカスとして火力発電に利用されます。

2007年には180億ℓのエタノールを生産しましたが、うち30億ℓは輸出（関税が高いのでカリブの国を経由してアメリカへ輸出）、残りの150億ℓが国内消費となります。このうち約25%がガソリンとの混合にまわされます。ブラジルには国内産で150万台の車のうち、ガソリンとエタノール、両方に使えるフレックス車が85%あります。

ブラジルの製材所の25%が炭を生産していますが、木の50%近くはエネルギーとして消費されています。アメリカは製鉄所で炭を使っている為（緑の鉄）、アメリカからの投資が多く入り、植林もしています。

ジョゼー教授からは、“日本では色々な分野で炭が使われているが、どんなものがあるか教えて欲しい”と質問されました。

全行程、大阪姉妹都市委員会の花田ルイス氏が同行して下さいました。この日も視察が充実し、昼食を取らないまま、次の予定のサンパウロ州立チエテ・エコロジー公園へ向かいました。ブラジル・日本移住者協会主催で、ブラジル移民100周年記念事業として展開されている「21世紀の森作り」全伯植樹キャンペーンに参加し、「日伯・友情の森」において、メンバー全員が記念植樹をさせて頂きました。



2月10日（日）

イビラプエラ公園

大阪なにわ会の下平尾哲男会長、山本剛介副会長のご案内で、市内で一番大きいイビラプエラ公園に行きました。その公園の中に、とても立派なブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑が建立されており、私達は異国の地で亡くなられた先人に思いを馳せ乍ら、献花をさせて頂き、慰霊碑の礎石の下にある、先駆移民の御霊を合祀した霊廟（平和慈母観世音菩薩木像・観世音菩薩立像・厨子に入った地蔵尊が安置されている）でお参り致しました。



日曜の公園は市民の皆さんの、まさに憩いの場となっており、本当に沢山の人が来園されており、移動劇場みたいなものも出ていました。慰霊碑からしばらく歩くと、これも又立派な純日本建築の日本館があり、数々の資料展示と沢山の鯉がいる日本庭園もありま

した。2004年には当時の小泉総理もここに来られたそうで、記念植樹もされていました。小泉さんが沖縄でのエタノール生産に力を入れておられる理由がブラジルに来てわかりました。



在伯大阪なにわ会との交流昼食会

なにわ会館の大ホールには、150 人程の人達が私達を待っていて下さり、舞台の側には



花で飾られたメインテーブルが用意されており、余りの歓迎ぶりに視察メンバー一同大変驚きました。

なにわ会は1965年8月25日に10名のメンバーで創立され、現在は約250名の会員数ですが、一世の方は殆どおられないとのこと。1982年にはサンパウロ市内ビラマリアナ区に、大阪府選出の自民党の原田

憲、中山太郎 両衆議院議員、森下泰 参議院議員、西山盤 大阪商工会議所会頭、村口昌久 海外移住家族連合会理事、住友グループ、松下電器 などの大阪府の大手企業の絶大なる協力援助を得て、地下1階、地上3階の日伯なにわ会館を竣工されました。



現在は、毎月1回の役員会で会の運営を取り決め、婦人部、青年部、カラオケ部、サウデ楽団や医療関係専門家グループがその運営を支え、バザー、カラオケ大会などの収益金より日系福祉団体に寄附されるなど社会還元に努められています。又、日本文化の普及促進の為、日本語、絵画、コーラス、歌謡、華道などの講座も開いております。

10年間も訪伯していなかったことで、皆さんが淋しく思ってたことが、ひしひしと伝わってきました。歓迎セレモニーの後には、各々のテーブルに分かれて座り、なにわ会の皆さんがご用意して下さったブラジル料理を、お話をしながら美味しく戴きました。



(下平尾会長のお話)

ブラジルは、1500年にポルトガル人によって発見され、1808年ナポレオンがポルトガルを攻めたことで、ポルトガル王国がリオデジャネイロに移ってきた。1882年 ブラジル国として独立。1888年 奴隷が禁止となり、労働力不足から移民導入が始まり、スペイン人、イタリア人、アラビア人が集まったが、彼らは農業に関心なく、その為、日本人の移民が促進され、1908年 第1陣が神戸より出港、サントス港に着いて今年で100年。日本

人の文化・心を大切にし、明治・大正・昭和の初めの日本語の発音、修身の心を一世より伝えられる。第二次世界大戦時、日本はブラジルの敵、日本語は使えず、病院などは没収される。 県人会を作り、日本の文化、日本人のあり方、大阪との繋がり、会の目的を伝える。大阪市より補助金も戴いていたが、2000 年からは止まっている。他の県人会は違う、交流がなくなれば滅びてしまう。なにわ会のことを忘れないで欲しい。

異国におられるからこそ、祖国に対する思いを強く持っておられ、日本にいる私達より日本人らしいというか、日本の心を持っておられるようで、今後交流を絶やさず、関係を持続していくことが大切であると思いました。



北海道県人会館

常夏の国ブラジルの人達に、日本の冬の雰囲気を経験してもらおうと、北海道県人会が北海道安平町から冷凍コンテナで新千歳空港から丸2日かけて取り寄せた、高さ2m という巨大な雪だるまが披露されていました。



会場には大勢の人が集まり、雪だるまに触れ大きな歓声が上がっていました。その混みようといったら、まるでラッシュアワーの電車のように、私達も人の流れに身を任せる形

で前に進みました。雪だるまは建物の回廊部分に展示してあったのですが、建物内の会場では日本の民謡や踊りなどが披露されており、ここも身動きできない程の人達に埋め尽くされていました。



帰国後見せてもらった日系新聞の記事では、この企画の発案は 20 数年前から日本国内への雪だるま発送を手がけてきた、早来（はやき）雪だるま郵便局の真保生紀局長で、今回の費用のうち

約 350 万円を自ら負担して下さったとのことで、海外輸送は初めての試みだったそうです。真保局長は、「多くの人に支えられ、夢が実現しました。雪だるまは何時間かで解けるけど、思い出は消えずに残るでしょう。」とおっしゃっています。雪は冷たいけれど、人の心の暖かさに触れ、改めて人を思いやる心の大切さを思いました。

リベルダージ地区

この視察で初めてまちを歩きました。リベルタージ地区という東洋人街で、ここにブラジル日本移民史料館の建物があり資料を拝見しました。ブラジルに移住された人々が辿った苦難の道程と、様々な人生の一片が残されていました。

この史料館は、1978 年 6 月 18 日、ブラジルへの日本移民 70 周年記念日に開館されました。3 フロア一からなる 1250 m²の展示スペースには、その時々の出来事が年代順に展示されています。史料館は、ブラジル日本文化協会によって維持されており、運営委員会が管理しています。



運営は史料館友の会会員からの寄付、記念品や出版物の販売、入館料、さらに法人や団

体の寄付金を財源にしておられます。

各フロアーの展示内容

- 【7階】
- | | |
|-------------|---------------|
| 1. 日本人の海外移住 | 9. 植民地の建設 |
| 2. 日伯関係の幕開け | 10. 移住者の知恵・工夫 |
| 3. 新天地ブラジル | 11. 移民の楽しみ |
| 4. 笠戸丸の移民たち | 12. 奥地型農業の推進 |
| 5. 出港から配耕まで | 13. 近郊型農業の創始 |
| 6. コロノ移民 | 14. 熱帯農業の振興 |
| 7. 原始林の開拓 | 15. 移住者の保護 |
| 8. 移民の開拓小屋 | |
- 【8階】
- | | |
|-----------------|-----------------|
| 16. 新しい栽培種の導入 | 21. 戦争という暗いトンネル |
| 17. 集約農業の誕生 | 22. 戦後日系社会の黎明期 |
| 18. 農協運動の芽ばえと発展 | 23. 日本移民の再開 |
| 19. 都会生活への第一歩 | 24. 日本企業のブラジル進出 |
| 20. 産業の育成 | |
- 【9階】
- | | |
|---------------------|--|
| 25. 二国間関係の新たな幕開け | |
| 26. 日系社会の変動 | |
| 27. 新しい時代の発展 | |
| 28. 東郷青児の絵画「移民開拓風景」 | |

(日伯美術連盟を通じて寄贈される)

1977年に初めてブラジルを訪れた東郷画伯は、日本移民の苦闘の歴史に深く感動され、当時進行中の史料館計画への協力を申し出られました。残念なことに作品の除幕式の2ヶ月前に急逝されました。

史料館を後に、姉妹都市提携を記念して命名された“大阪橋”を視察しました。橋と言っても下を流れているのは川ではなく自動車道です。この橋に関しては、作詞家のもず昌平先生から“鉄骨の手摺がとても傷んでいるので、大阪で塗り替えてもらえないか？”と言われたことのある橋でしたが、私の



見る限り、ペンキの塗り替えだけで済むようなレベルではないと思えました。鉄骨の手すりといっても、とても細い物で、日本ではおそらく建築確認申請は通らないだろうと思われる代物でした。正直なところ、橋本体の架け替えが問題になると考えます。

2月11日（月）

クリチバ市

視察最終日、国際的環境都市といわれるパラナ州の州都であるクリチバ市（Curitiba）へ向かいました。午前10時10分発のJJ3007便にて、午前11時05分クリチバに着きました。元クリチバ市環境局長の中村ひとし氏が空港で出迎えて下さり、丸一日同行して頂きました。

今回の視察先にクリチバ市を選んだ理由は、クリチバ市が国際的評価を受ける環境都市であるからです。クリチバは、1853年12月19日、サンパウロ州より分離独立した現パラナ州の州都となり、以来パラナ州の政治、経済、文化等の中心地として発展し、特にジャイメ・レルネル前州知事が、クリチバ市長を3期（1971～75、1979～83、1988～92）務めた時代に、住民の生活、及び環境保全を重視した都市計画、並びに環境教育を策定したことから、国際的にも知られる環境都市に発展しました。当時のブラジルとしては斬新

なゴミの種分けや、2両・3両連結バス、及びチューブステーションの導入等を実施し、26箇所ある公園の緑地面積は約8,100万㎡に及び、市民1人あたりではWHOが奨励する市民1人あたり16㎡を大きく上回る49㎡あり、1990年には国連から環境都市として表彰されています。

中村ひとし先生は、1944年島根県でお生まれになり、1969年大阪府立大学農学部造園学科で修士課程を修了した後、1970年にパラナ州に移住されました。その後、ふとしたきっかけでクリチバ市役所に勤めることになり、環境問題に取り組まれるようになりました。レルネル市長の3期目には、環境局長を務められ、その後1995年、レルネル市長がパラナ州知事になったことからお誘いをうけ、パラナ州環境並びに水資源庁の長官に就任される等、環境問題のスペシャリストであります。現在は退官され、環境市民大学や兵庫県人会パラナ協会に所属しておられます。

パラナ州は兵庫県と姉妹州であり、クリチバ市は姫路市と、マリンガ市は加古川市、ロンドリーナ市は西宮市、パラナグア市は淡路市と姉妹都市です。

クリチバ市は人口約180万人、うち日系の人は約3万人おり、日系企業も古河電工、日産など、多くの大企業が進出しています。

在クリチバ日本総領事館

市長官房長官ルイ・キョシ・ハラ氏、環境局長ジョゼ・アントニオ・アンドレゲット氏、都市交通公社総裁パウロ・シミッチ氏らとブラジル料理のシュラスコの昼食懇談を共にした後、一旦お別れし、在クリチバ日本総領事館を表敬訪問しました。総領事館は市内のビルの中にあり、ここでもセキュリティチェックを受けた後、エレベーターで上り、着いた先は結構こじんまりとしたテナントビ



ルの一角という感じの所でしたが、窓からはすばらしい眺望が広がっていました。

佐藤宗一総領事からパラナ州の概況、クリチバ市についての資料を戴き、お話を伺いました。

領事館の仕事は、草の根無償資金協力として、主に病院（医療機材）、学校、保健（保健所建設資金）、職業訓練などに係る事業に対し、1,000 万円以内の小規模支援を年に 3～4 件行うことや、日本への出稼ぎに行く方（日系人であること、3 世までであること）の身元、身分保証である労働査証の発行などがあります。



クリチバ市役所

都市交通公社総裁 パウロ・アフォンソ・シミッチ氏、都市交通公社交通部経費管理室長 ダニエウ・コスタ氏からバスシステム等、都市交通施策について大型スクリーンを使っての説明を受けました。

クリチバ市では、道路の優先順位を人、バス、乗用車としており、幹線道路と住宅に入る普通道路とははっきり分けており、公園や散歩道を確保する為にわざと道路を狭くしている所もあるそうです。道路ははっきり言って理解しにくく、軸線に当たるとどこに居るのかわからなくなるような、初めて運転する人には困難を極める道路のようです。

骨格軸となる 5 つの幹線道路を作り、中央部分をバス専用レーンとして確保し、渋滞を緩和すると共に、停留所をチューブ型として、運賃は停留所での先支払いシステムで、プラットフォームの高さはバスの乗降口と同じにしてバリアフリー化することで乗り降りを円滑にし、停車時間の大幅削減を実現しています。又、これらのシステムにより、バス運行の高速化が図られ、同時に三重連続バスを導入することで、1 度に 270 名の乗客を運べる大量輸送も可能となりました。



5つの幹線軸上にあるバス専用ルート（58km）を骨格として、専用ルート上にあるターミナルから近隣へのアクセスとなるフィーダー・ルート（枝線 270km）ターミナル間を結ぶ環状ルート（185km）で構成する RIT（総合交通ネットワークシステム）を導入して、市内は全域同一料金となっています。バスは、10の民間バス会社が委託を受けて運行していますが、URBS ウルビスという交通公社が全ての交通を管理し、路線・運行時間についてもウルビスが決め、料金収入は一旦ウルビスに集められた後、各バス会社に配分されるのですが、配分率は乗車数に関係なく、走った距離によって換算されるので、乗降者の少ない路線も運行可能となります。料金は 1.90 レアル（約 125 円）で、保護者の収入が月 1,000 レアルの家庭については、50%の割引きがあり、2人以上の学生がいれば人数が増える毎に割引率も up します。ウルビスはタクシーも運営していますが、1974 年以降台数は増えていないそうです。

これらは、1966 年、クリチバ市マスタープランによって作られた交通プランで、1974 年に一番目の南北線が完成し、徐々に延伸を続け、今では近郊の 13 都市でもシステムを導入しています。クリチバと、近郊の 13 の都市で、一日 350 万人の利用があり、クリチバ市内では往復する人も含め、1 日 230 万人がバスを利用します。今ではこの交通システムにより、バス事業が補助金なしの黒字経営です。3～4 年もかかる大 project ではなく、すぐにできる小さな project にすることで（地下鉄は高価）予算も少なくて済み、100%出来なくても柔軟性を持ってやればいいという、ラテン系の大らかさ？があるようです。

環境寺子屋 ECOS VILA VERDE

ECOS = ESPACOS DE CONTRIBUICÃO SOCIOAMBIENTAL

中村ひとし先生のご案内で、ヴィラ・ヴェルデ第1地区にある ECOS VILA VERDE を視察しました。



1990年に始まったピア・アンビアンテール（環境に優しい子供）の施策は、スラム地域においてあてにならない大人ではなく、純粋な子供の時代に環境の大切さを教え、将来へ繋げていこうという取り組みで、ファベラ地区に寺子屋のような居場所を作り、野菜づくり、山羊の乳搾り、読書、サッカー、工芸品づくりや環境教育を、2歳から14歳までの子供達を対象に行なうプログラムです。

学校での環境教育以外にも、ファベラや低所得者の子供達には、リサイクルの環境教育を受ける機会を提供し、分別能力の向上、環境への理解の醸成と共に、学校以外の時間に親子とも安心して過ごせる空間の提供など、空腹にさせることなく犯罪から子供を守るという社会的目的もあります。教員資格を持った指導者のもと、地域の人を積極的に雇うことで、仕事をつくることにも役立っています。

クリチバ市では、ゴミ分別回収を市民の環境学習実践の場と位置づけ、家庭から排出されるゴミを、リサイクルできるもの、できないものに分別しています。

リサイクルが成功した理由の1つは、「再生可能か



否か」を分別基準としたからで、日本のように「燃えるゴミか否か」を分別基準にすると、人々の環境意識が育ちにくいと言われています。

又、収集されたゴミは重量を測り、リサイクルプラントに運ばれた後、再び分別されますが、ここで得られた収入は市に還元され、社会プログラムで使われます。

ゴミ収集トラックが入ることの入ることのできないファベラ（不法占拠地区、スラム）では、住民が持ってくるゴミをバスケットや野菜と交換するプログラムがあります。ゴミをゴミとして取り扱うのではなく、自然資源の節約、自然保護への協力・参加とし、分別理由を明確にし、楽しく分別することで市民の参加意識が高まり、ひいては市民としての誇りも生まれ、95%の市民が環境都市クリチバを愛すると言っています。



終りに

10 日間の日程ですが、実質 8 日間の視察は充実したものとなりました。正直なところ、もう 1～2 日あればクリチバ市をもっと見られたのという気持ちがあります。折角、遠い地まで行ったのだから、追加料金（自腹）が出たとしてももう少し見たかった。日程の制約もありますが、予算を超える部分は自費参加としても良いのではないかと思います。

帰路は、クリチバ市視察を終えた 2 月 11 日（月）午後 7 時 25 分発 JJ3336 便でサンパウロに戻り、午後 11 時 55 分サンパウロ発 JL047 便にてニューヨーク、2 月 12 日（火）の午前 6 時 30 分にニューヨークにつき、午前 9 時 00 分発 JL047 便で 14 時間 10 分かけて成田へ、2 月 13 日（水）、午後 1 時 10 分成田着。午後 4 時 25 分発 JL3005 便で伊丹空港に午後 5 時 50 分無事到着しました。ほぼ 1 日半かけての帰国です。

途中、成田空港で、2 月 14 日号の週刊文春が、私達が拝見した日本文化をテーマにした

サンバチームの演技を酷評する記事を見ましたが、おそらく生のパレードを見ることなく、送られてきたカーニバルの写真を見ただけで書いた記事ではないかと思います。現地で見せて頂いた私達の感想とはまるで違うものでした。やはり、直に見ないとわからない事が一杯あるのだと痛感しました。

今回の視察で、多くの人にお会いし、そして大変お世話に成りました。

出合うことの出来た全ての方々に、心より御礼を申し上げます。

そして、皆様から学ばせて頂いたことを、必ず今後の大阪市政発展の為に反映していけるよう、努力して参ります。

本当に有り難うございました。

大阪市会議員 有 本 純 子